

内閣総理大臣 岸田 文雄 様
外務大臣 林 芳正 様
法務大臣 葉梨康弘 様
内閣府男女共同参画担当大臣 小倉将信 様

女性差別撤廃条約選択議定書のすみやかな批准を求める要望書

女性差別撤廃条約選択議定書は、条約の実効性を強化するために 1999 年に国連で採択されました。2022 年 10 月 1 日現在、条約締約国 189 カ国中 115 カ国が選択議定書を批准していますが、日本はいまだ批准していません。2022 年 7 月 13 日、世界経済フォーラムが発表した「ジェンダーギャップ指数」は、世界 146 カ国中 116 位と低位で、主要 7 カ国の中での最下位が続いています。

女性差別撤廃条約選択議定書は、条約で保障されている権利が侵害された場合、国内における救済措置を尽くした後に、個人等が女性差別撤廃委員会に通報し、救済を求めることができることを定めています。また、女性差別撤廃委員会が、条約に定める権利の重大又は組織的な侵害があるという信頼できる情報を得た場合に、当該国の協力の下で調査し、当該国にその調査結果を意見・勧告とともに送付する手続を定めています。

選択議定書を批准することにより、女性差別撤廃条約上の権利を侵害された個人や団体が女性差別撤廃委員会に通報できるという道が開かれます。

現在、日本の裁判所は、女性差別撤廃条約を判決の判断基準にしていませんが、個人通報制度が使えるようになれば、国際基準が尊重され、日本の裁判所が女性差別撤廃条約を裁判に適用するようになります。

国連女性差別撤廃委員会が日本の本条約実施状況報告審議では、選択議定書の批准が奨励され、日本が批准を検討するよう繰り返し求めています。ところが、国は個人通報制度が女性差別撤廃条約の実施に効果的な担保を図るものとしながら、20 年以上も検討し続けているだけです。

政府は、第 5 次男女共同参画基本計画で、「女子差別撤廃条約の選択議定書については、諸課題の整理を含め、早期締結について真剣な検討を進める」と明記しています。

したがって、全日本年金者組合は、国会及び政府に対し、男女格差をなくし、全ての人の人権が尊重される社会をつくるため、一刻も早く選択議定書を批准するよう強く要望します。

2022年11月1日
全日本年金者組合
中央執行委員長 杉澤隆宣